Salut on 改題 N-ro
5.Sep.'76. 194
Ed; Kou MUKAI
354, Kameyama, HIMEZI, Japan.o

イオム通信
発行　姫路市かめ山354
向井　孝
通信連絡一切は
大阪市西淀野区加島町2-12-2
泉原文化　サルートンへ

高畑（藤井）信一さん！

八月二六日付で岡山県玉野の平井さんから、『…今日岡山の藤井信一君の死の通知に接しました』とのハガキがきた。七一年四月亡くなった小松亀代吉さんの追悼文集（『敬迂須』）（ぼくが編集発行した）でこれはまだ小部数ぼくの手許にある。ほしい方にお頒けする）―第一頁の写真で、小松さんとならび、ゆったりと腕ぐみして、男のやさしさと頼母しさそのものを恥にあらわして、じっとこちらをみつめている偉丈夫―それがぼくの脳裏にある高畑さんの面影である。この写真をみるとぼくは戦後アナ運の分裂前後の一時期、運動がもっとも細々として途絶えかけようとしたその頃の、高畑さんの肩にかけられたものを思いだす。現在の運動がもしその頃僅に灯を守りつづけたことによって、それを火種とした部分があるとするならば、高畑さんは決して忘れられてはならない人である。とともに別してぼくは、岡山から発行の平民新聞編集のため、月二回通ったこともあって、一段思い出が深い。

高畑さんとは昨年の12月25日、10年ぶり位に訪ねていって逢った。そのとき、とびとびで不充分ながら、その波瀾万疊（だがそれが高畑さんの口から語られると、ゆるやかな起伏の丘のうねりのようにおだやかだったが）―の生涯の思い出をきいた。そのとき、発声がかすれていて、一頃全くしゃべれず水も通らなかったということをきいた。それをここまで自分の治療でなおした。いま自分が死ぬとたちまち困る人たちをかかえている。あと何年かはどうしても死ねないのでがんばっている―という話だった。そのとき聞いた話は改めてかきたい。

補遺　女と政治

前号サルートン一九三号にかいた小論に対して、いろんな反応があった。ぼくの書き方がまずかったというか、やゝもってまわった云い方だったせいがあって、あの小文で云おうとしたことが大半には正確につたわっていないように思われる。それで改めてもっと直截に、もういちどくりかえしたい。

ぼくの云いたかったことを、最終的に云えば、男たち（へ）ぼくをもふくめて）次のような問いかけ！である。―

『もしや、革命とか変革とかいうことといった不定量を示す相関詞である。一九四七年二月ぼくは山口英のちに柳井秀・高島洋・生田内らが加わった詩人集団イオム同盟をつくり、詩誌イオムを刊行五九年で憩んだ。六五年二月ぼくが個人通信を出しはじめたとき、それは〈イオム通信〉となって約七年140号になった。七二年十二月、山口・高島・ぼくも同人に加わって神戸から思想と文芸誌・季刊〈イオム〉が出るようになり、141号からサルートン通信と改題することとした。その〈イオム誌〉がこの六月廃刊となったのを機会に、再びこの個人通信をイオムとする。サルートンも約四年五十数号出して、いつしか呼びなれ、何となく愛着があるが、久しぶりに題字をかきながら、その字体など、何も考えずに指先がおぼえているままにすらすらかけて、やはりイオムの方がなつかしい。今後はサルートンに続くものとして、どうかよろしく。

（上段左端より）とは、男たちだけが女たちの思いやくらしと関係なく、ひとり合点でさわいでいる、それゆえせいぜい世界の半分程度の問題ではないのか』

『男たちだけでつくりあげた女不在の世界を、それは悪い、あれがよいと、男たちだけであげつらっているからこそ、女たちは無関心たらざるをえない。それを女の方に原因があると思いこんで、男自身、おのれのひとりよがりの問題に全く気付いていないのではないか。』

『男たちは、「女が政治（革命）に無関心であることをどのように覚醒させるか」を求めるまえに、「女たちにとって何がもっとも関心事であり問題であるか」「そのことによる革命・変革とは何か」を男の問題として考えねばならぬのではないか』

―どうもぴったりと心中のおもいを表現できないが（この云い方ではキレイゴトすぎる）、〈女の政治〉への無関心こそが、男たちのいう革命のキイポイントであり、すくなくとも重要な示唆としてつきつけられている集点〉として、謙虚に受けとめねばならぬことではないか。―ということである。

それからもうひとつ、―〈男と女とのすれちがい〉としてあるべき女の世界（の存在）あるいは、前号の⑦でかいた問題―この例はやゝ説明不足のまゝ提出したので誤解を生じたかもしれないが―についてである。

ぼくはそこで、それを、おんなのすばらしさ（男たちの覗きみることのできない、おもいはかりえない性―つまり暗所におかれた宝石が何かのはずみに、きらりとひかるそのように！宝石を見ることはできないまでも）―しゆんにして世界をひかりかがやかせる―そのことのおどろきの問題である。多くの女たちはこのことに気付かず、男たちの多くは、そのおどろきのおもいをかくして「女をおとしめる」ことの例として使っている。が男たちが、おのれの世界を時おりに照しだす、その光を虚直なすがたで讃嘆するところから、男のいう革命は、眞に革命への道を歩みはじめるのではないか。いまぼくはそうしみじみ思っている。

あとがきから

☮ 沖縄久米島への旅、台風がきてすこし予定より早く、十日たらずで帰ってきたが、その印象は日毎に深く影をおとしだしている。ぼくの生涯のひとつのエポックになるような気がする。金沢のIさんが同行で、ぼくは精神的にとても助けられた。そしてその人柄に学んだ。このことについては改めてかく。宮村さん、仲村渠さん、宮城さん、佐伯さん、野瀬さん、西村さんその他の方々ありがとう。往復とも船はちつともゆれず、船酔するものなし。みんな泡盛党になつた。

☮ 三一書房から、新刊で、逸見吉三著〈墓標なきアナキスト像〉B5二四五頁千五百円が出た。この刊行には、ぼくは全く無縁なのだが、これは雑誌現代の眼に、逸見さんの論などをもとにして、ぼくが書いたものだ。逸見さんが書いたようにーという若干の文献と、逸見さんらしくということではすこし自分の心情投入をセーブした面もあるが、ともかくぼく自身の当時の力を、すべて投入して一生懸命かいたものである。すこし出版に変な事情があつてへおそらくこの出版を世話した人は、どんなに面白くつても、ぼくへのうしろめたさをかくしえないだろう)、一冊の本も安路をうけていない。僕自身本屋でかうというわけなので、日頃いろんなものの呈贈をうけたり、又、執筆上で教示や資料を頂いた方に贈呈することができなくて申しわけない。とくに三四年前、その刊行のせつはおれ代りに送ると約束して、運動史の年表つくりのため調査表に協力頂いた七八十人の先輩同志の方には、違約をおわびする。そして、ぜひよんで下さいとお願いする。

☮ いま「直接行動」の創刊号、二号と連載している〈墓標のないアナキスト群像—続〉〈大逆事件の周辺で〉や三年前?現代の眼に半年ばかり連載した〈続墓標のないアナキスト群像〉〈これは何年の名でかいた〉は、この三一から出た本の内容と連続して前後にあるものである。

☮ でく大ざっぱに云うと、ものごとに対して、二つの対応の仕方がある。たとえるならば、〈ピンポン〉と〈キャッチボール〉である。ぼくらはあまりはつきりとは自覚せず、処世の上で、その二つを交互につかいわけたり、その変化的なやり方をとりまぜて日々を暮しているわけだ。ところで、相手が意図してか、しないままでか、ともかくピンポン球がぼくの方へと打ち込まれてきた。キャッチボールなら球をうけとめて、相手がうまく受けるようになげかえすところだが、ピンポン球は相手の虚をねらうて、はげしく打ちかえすものである。投げかえしたら直にういてサマにならぬだろう。つまり、ぼくはうつかりピン球をうけとめて、持ちもおろしもならず、何度かそのまく捨てようと思つてそれもならず結局、投げかえすというヘンなことをやつてしまうことになつた。それが本号の別についた一枚で、我ながらひどい内容だ思う。といつてーこれをかくことで、いささか胸のなかのもやもやがはれたーということも事実。しょせんぼくは行いすました聖人ではなく、ほんとにいやらしい小人だ!

一部の親しい?、事情を知つた方に同封する。

☮もし、こんどピンポン球がはげしく打込まれてきたら、ぼくはすばやくその台から放れて、球がどこかへとんでいくままにまかせる。球のはねるのにまかせる。もう大丈夫だ。

☮ 九月十五日、午前十一時から夕刻まで、半日だが永らくやつていない石川文庫の整理をやりたいと思う。体を空くん人は手伝つて下さいませんか。住所等判らない方は、地図を送ります。ハガキ下さい。よろしく。

今回はパンフ等の目録つくりと、昭和初期のビラなどの分類をやるつもり。

☮ 八月一ぱい休んでいた、サルートンでの毎週土曜午后からの読書会と雑談夕食会を、九月四日(土)から再開します。どなたでも参加歓迎。 その日午后六時ごろから八時ごろまで、たまたま訪ねてくる長船青治さんの、テナーサックスのソロ演奏を、みんなで聞く会をひらくつもり。すぐそばの公園へ出かけて、野外音楽会。コーヒー付二百円?、その收入はもちろんウリ企画へのカンパ、というわけ。前征ジャズの好きな友人など誘いあわせてぜひどうぞ。

☮ なお、5日(木)か6日午后六時から、大阪駅向い旭屋のウラ、大メガ喫茶店でも、やることになつている。こちらの方へもぜひ。八日時、わかればおしらせします〉 その他、15日までの滞在中、京都、大阪、神戸姫路などで、それをやらせてくれるところあれば、どこへでも出かけていくと云つてきている。ギャラは例えばコーヒー二百円だとするとチャージ料50円位を加えて、10人でも15人でもその分だけをもらうという形。それはみんなWRーへカンパすると云つてきている。どこが受入れてくれるところありませんか。助つ人を!

☮ 16日東上の途中、夜は静岡に立より、大杉らの墓前祭ですこしの時間でも演奏したいといつている。

ぼくもこの日、東京からの帰路、静岡の墓前祭に参加しようと思つている。

☮ この墓誌建立のカンパは、もうあとすこしの追い込みにはいつている。同封ニュースをごらん下さい。そして、できれば一口五百円のカンパを!

☮ 〈直接行動〉二号ーアンケートがぼつぼつ返つてきて、好評のようなのでよろこんでいる。苦心した〈大逆事件の周辺で2〉が、ていねいな手紙つきで感想が書かれてくると、その日、一日中、もつとしつかり、次号も、早目に準備にとりかゝろう!とはげまされる。

☮ 貶政的窮之が、やゝ眼にみえてくるようになつたので、このイタム通信の送付も、通信費節約で減らすことになるだろう。いま送付用封筒(切手貼布)を頂いているのは二百余人。封筒をかいて送つているのが同じく二百余人。できれば宛名記入、50円貼付の封筒を送つて下さい。 合言葉ー切手にのりを。8月31日朝

よみがえって来なければならぬ感じ。ここにかいてあった要点を消去して、てんたうまらぬ私情だ一体何なのだーと思うのだが

〈三二書房〉墓標なきアナキスト像 ―逸見吉三著― をめぐる私的な問題

①　久米島から帰った翌日、K君それから半年ぶりにY君が訪ねてきて「やあどうしてたんや、」など歓談した。その時、Y君が「あ、本、買いましたよ」と云ったことから、八月十五日、首記の本が出たことをぼくは知った。その翌日、簡易書留の書簡で白井新平（以下S氏とよぶ）さんから、八月八日ぼくが出した問合せに対する返事をうけとった。

②　S氏の手紙は、無礼でひどいものと思われた。しかしこれについて否応云うことは、泥試合に自分をひきこむことであり、S氏のいやらしさに自分をおとしめることに外ならない。S氏をいい気にさせるのさばらせることにもなるが、一方でH さんE さんなどを引合いに出さないで、最後のしぼりのはなむけにもなるーということで、ぼく一人がだまっておればすむことだーと考えた。

③　そう思ったものの、ぼくは、すっかり世の中がイヤになった。馬鹿々々しかった。S氏だけはやはり見逃すことはできぬと思った。HSやE氏は先今で、ぼくとしてはただ気の毒というだけで、その手落ちやぼくへの非礼を黙殺できる。がS氏は二三数年その駄力？によって東京の運動関係に首をつっこみ、その筆力？によって、過去の自己が一時期（約七・八年）展した運動の汚濁の正当化と、他のすべてのものの誹謗のために、精力的な自己顕示の情熱を傾むけている。（ぼくはS氏がその個人誌にかくものについて、自己主張はよいが、昔の問題を現代にもちこんで運動を混乱させるような、そしてとくに個人名をあげての攻撃や非難は反対であると感想をのべたところ、びっくりするほど過敏な、敵がい心を弾らさまにした手紙をもらったことがある。それ以降S氏は来夜してもぼくと連絡しなくなった）つまりS氏は、敵にするならばなかなか力をもった、その上あの手この手の策略をたてれば、ぼくなどとてもかなわぬ相手というべきで、それゆえ一そうぼくへの無礼をゆるすべきでない…だが…

④　そこでぼくは、ひとつの賭をした。八月三〇日までだまって待ってみよう。もしその間に（墓標なきアナキスト像）が、たとえ一冊でも寄贈されてきたら、それでよいとして、馬鹿になりきろう。誰の名前であろうと、ともかく世間の人にひろく、ぼくの書いたものがよまれるということをよろこび、逸見さんにも、よい本ができましたね、とイヤ味でなく云えるときを待とうーということである。そのことを心ひそかに期待して、日時がすぎた。一今これをかき出したのが八月三十日午后十一時三〇分である。そして、事情のしらぬ読者にはあまり判ってもらうことを考えず、でく簡単に、ことの経緯をかき事情通の方があれこれ憶測されたり、S氏側からの情報だけで判断されることに対して、ぼく自身の、とくにS氏に対する立場をはっきりさせておくことにする。ことの成行上S氏への非難ともとられかねないが、けんかする気も、改めて権利を要求する気も毛頭ない。たゞハレンチ事件にかゝわりあったことを悲しみ今后一切はこの一文だけでへうしろめたい犬がどのように遠吠えしようと）かゝわりを断ちたい。

⑤　八月八日ぼくは白井、逸見、三一書房宛、同文の次のような手紙がかいた。七日訪ねてきた寺島珠雄さんのすゝめによるものだった。要約すれば

『今日、寺島氏が訪ねてきて三一の出版年内に（墓標なき…）が出ていたが君知ってるかーとのことだった。それで「もう二年ほど前何かのとき白井氏から吉ちゃんの死亡を聞いたい。出版したい」というてきたことがある。それからすこして逸見氏が訪ねてきて、白井氏が出版社三一に交渉していることでアー承を求めてきた。それで三一に現代評論社で出すということで取きめた條件（契約書を作成した）1逸見氏宛白井の共著とする。2、印税は折半ということで、それの通りなら結構だと了承した。今さら押すまでもなく出版責任に責任ってこのことは考慮されていると思うが今迄何の連絡もないので確認かちゃ問合せする』

―――

現代評論社よりの出版は逸見氏立合いで契約したのだが、共著としたのは、その前半については逸見さんより談話やメモの提供があったが数回後からは、実際の九〇％はぼく自身がまとめたもので成り立ち、或は全く逸見さんよりの資料なしでかきつゞけるということになったからである。しかも逸見さんはぼくの書いたものに一字も手を入れず一任、たゞ原稿料がはいればよいーという形だったので、出版に際し、例え誤植の訂正でもよく、ぼくの書いたものへの書き加えや改訂をしてもらって出すーということを條件にぼくはした。事実関係でちがうことをいくつか指摘されていたので、ぜひそれもやってもらいたいーとぼくは思った。が結局、逸見さんの体力やその他の事情からか、それは実行されず、半年前君に任すとなった。ぼくはそのようなあやまりのあるものは出せないーということで後退した。一方出版社からあまりに原稿入れがおくれるので逸見さんに見合せを考えている、といってきた。それでやむなく断って契約を取消したーという事情である。

もうひとつ共著を今回改めて主張した理由は、「山鹿素行、人と生涯」という本を一昨年ぼくはかいた。そのかき出しなど十数頁は、逸見さん名でぼくがかいたものを引用している。これは盗作でないかーと或る人が云ってきたことがあった。このような誤解をさけるため、共著にしておいてもらいたい、そのことは決してぼくのためだけでなく、逸見さんをおとしめることにもならぬと思ったからである。

⑥　S氏の手紙はこのような事情をよく知りながら、とてもカリコよく自分ひとりをへ他人のフンドシでヨイショにしている。つまり「今回は全部小生の責任です、めたことで逸見氏に無関係、今后文句は僕一人に持ってきてくれ」とある。その通りだとおもう。昔三名の本が一冊売上産にあってよい。その印税も先後を助けるーそれをおれがやってやるーという立派きだ。。S氏の私財は数十億ときくが、それなら、ぼくのミミッチイふんどしでなく自分の財布から二千万円もそっと踏ったら…など、ついヘラズ口もたーきたくなる。ともかく、へんなひとりきありでなく「どうもすまん。」と今からでも云ってくれれば、それでもうよい……。

ー表よりつづくー

⑰　いよいよ泥沼にはまってきた。もうめちゃめちゃだ。S氏の返信を左にかいてぼくの立場をつけ加える。もうヤケクソ。

□「現代の眼」に色見吉三の署名で発表された長文書は著作权ですべて色見吉三にあると解している。誰が代作したかは問題でない。その間の曲筆舞文、錯誤すべて署名者にあって代作者にない。□（ゴ三者に対してはその通り。だがぼくと色見さんー当初執筆をとりきめたときの事情や雑誌連載中にトルートンへきて、調査や資料あつめ、原稿清書などを手伝ってくれた若い仲間たちをも多少はふくめてーそれゆえS氏もーがそう主張するのはおかしくはないか）

□代作者はこの労力の報酬はすべて、その発表時に受領している。ーへたしかに調査料として色見さんから原稿料の一部をうけとった（だがそれは代作料としてではない。）これを共著だと主張することも印税のことなど、著者がそれを承諾しない限り筋違いだから、これからも取合う意志はない□　ーへH氏はこの出版の話に来たとき、ぼくが現代新潮社契約通りといったことをきき、なっとくして帰っている。だから筋違いどころか違約である。問題はS氏が、多分、そんなもの無視しろとH氏によいカッコして吹込んだのにちがいないということ）ー

□僕がこの出版を吉三氏にすすめたのは、大正、昭和を通じて最もアナキストらしい一生を生きた「吉ちゃん」に墓碑銘として色見吉三著の本が一冊あってもよい、是非欲しいと思ったからだーへそのことはもつともだ。としてもそれなら H氏の生活的な面倒をみ、自由に筆がとれる時間を与え、資料を提供するなどして、ほんとうに自分でかいたものを出すような、物心両面の援助をS氏がやってくそではないか。代作？このものを自分の名で出すといったー若い流行歌手まがいの匿名が、果して真の墓誌銘だとするならSさんのH氏へのおもいやりはブルジョア的に毒されている・そればかりか実は貶しめていることに外ならぬ。だからくそぼくは、H氏がちょっとでもぼくの原稿に手を入れることで、実質的共著とすることを條件にした。手を入れない不備なものを出すことを取りやめた。それはぼくのためにでは決してない）

□君と六本木で会った部、もし君が共著で印税折半でなければやらでない、といったら、それは文筆業者として筋違いの要求とハネツケていたろう。この時この件について何も云わなかった□　ーへ六本木へいったのはE氏の自伝出版について、E氏よりいろいろ相談をうけ、大阪でも生野益太郎さんなどをたずねて、その結果、S氏とE氏とは年来の仲でもあり、その個人誌にもE氏のことが何度も登場するというような事情から、S氏居宅六本木へその出版についての便宜供与をE氏に代って懇請するためだった。その結果、半自費出版へE氏が二千万出す）ということで、S氏の印刷所？で刊行されることになった。それは再版されるほどに売れ幸いS氏には政治的逆流（労力は別として）もかけなかったと思う。このE氏の自伝前半は、E氏よりの聞き書きをもとにイ大ム誌に上中下三回にわたって八江西一三とその時代」の題で何年者の名で発表したものだが、今はそれは問題でない。たゞ白井氏の編集？助言などによってかよらずか、例えば後記の出版にあたっての協力者の中には、何故かS氏、その秘書A氏その他の名だけということがある。E氏は決してこんなことをする人ではないし、ぼくのばどうしてだろうという不審がぼくにある。

それはともかく、この話をしにいったので、H氏の本についてではなかった。そこで一言二言あったものの、出版の條件など（無論）ちゃうすいあいの場所でなかった。尚、ぼくは文筆業者ではないが当然のこととして、印税のことは事務的かつ解的な話合い事項と思っている。S氏がH氏が困っているから、おまえ手伝しろーと云ったらきっと"よろしい。その代りSさんあんたもぼくの二〇万か三〇万に見合う位のものを出す気はあるでしょうね」といっただろう。

□吉ちゃんとして、その舞文ぶりに不満のところがあるので、そのあと吉三名で出すことを断ったと僕に話している。（これは信じられない。ことばのハズミだろう。その証拠がすぐ次のことでわかる）ー出版に際して訂正加筆するーを約半年まったが、それもやれずにこのままで出してよいという許可があったので、見出しその他、多少単行本に通ずるよう訂正して最少限の編集で難波のプリントを廻したのである。ーへ見出しその他をS氏が若干改訂したのはよいとしてーまだていねいには見ていないがーたとえば、現代の掲載当時、寺島珠雄氏から提供をうけた原稿（飯田徳太郎のこと）が、その根し書へ寺島珠雄氏より次のようにかいてしらせてくれた云々の九行が削除され、全く著者の文章として約四頁のせられているーといった不当な削除が見うけられる。これはS氏の責任にしても第三者にとってはH氏の責に帰すものとなり、いらぬS氏の配慮がかえってH氏をおとしめるものというべきだろう。

□追信・僕は日本のアナキズム運動史の研究家はアナキストとは考えていない。（ーこのあとの方でS氏は自ら「アナキストなぞというイデオロギストではない」といっている。それなら、誰がアナキストで誰がそうだなどのおせっかいはやめればいいのでは？ー）秋山や大沢の徒はアナキズムで原稿を稼いでいる文筆業者、一種の語り部だと評している・君が：だんだんイデオロギーを売物にしてメシを喰う語り部に堕してきているのではないかという気がしてきた。アナキストならたとえ口舌の徒にすぎないにしても、コマーシャリストでなければ、あのような文書を書かなかったろう。あの本の印税は全部吉ちゃんに渡るようにしてある。吉ちゃんがそれをどう使うか。まあ一版50万位のものだろう。それくらい、老人のハナムケでと僕は考えている。思いの外それが大きくなったとしても、もし吉ちゃんが君のことを話し出したら、必要なしと答えるつもりだ・既ーへ印税ー本さえ送ってこないのだから見せみないだろうがーもうぼくは要求しない。だが渡すというなら当然もらいます。S氏が自分も金をもすというなら別）　ああイヤダ。もうやめるー

★でもともかくぼく自身、迷惑さえなければ、そのとき一生に一人命かけたものだから（墓碑銘をアナキスト像）千五百円・四万でよんでください。